平成6年10月25日

順正寺報第二十号

報恩講御案内

秋冷の候、皆々様には御健勝にお過ごしのことと存じます。

さて、例年の通り『報恩講法話』を左記により厳修致します。

宗祖『親鸞聖人』の徳をたたえ、念仏相続の御先祖の御陰を偲びお勤めする大切な行事です。皆様お誘い合せて、万障繰合せの上御参詣下さい。

記

十一月二日（水…文化の日）

午后一時より

読経（衆僧供養）

法話（講師・京都　即成寺　江口　貫裕師）

おとき　以上

順正寺　住職

江口貫照

『報恩講』について

『報恩講』というのは、親鸞聖人の御恩に報いるというところからスタートしているのですが、「恩に報いる」という事は、「恩」を実感しなければ「報いる」という行動は起きてこないのです。

今の世の中では全て自我が優先して、人様の御恩、親兄弟から受けた恩に気が付く人は少ないようです。「恩」という感覚は自らを見詰めるところからスタートする。「誰かから何かをされた」というところからスタートしていては恩を感じる事は出来ない。自分の中にある、生命、肉体、自分の全てをじっくりと見詰め直す。そうするとその中に親から受けたもの、周りの人々から頂いた、色々な思い、知識、文化、そういうものが見えてくるはずです。それを取り入れ、受け入れたのは、「私」かもしれない。が、それを「取り入れ、受け入れてくれ」という願いがあって、始めてこちらが受けられるのである。自分が賢いから「それ」を受け入れられたなどと思ったら大きな間違いである。　小さな子供が父母を、「お父さん、お母さん」「パパ、ママ」と呼ぶ時、その呼び声は、「パパと呼んでほしい、ママと呼んでほしい」という親の願いがあって、初めて出てくるのです。自分から、賢く、気が付き、「パパ、ママ」と呼んでいる赤ん坊などいやしないのです。スタート・ラインを見て下さい。そうすると、自分に、「お父さん、お母さん」と呼ぶことを教えてくれた親の恩がそこにある。「呼んでほしい」という『親の願い』があって、始めて「パパ、ママ」と呼べるのです。

そういう所に気が付けば、『恩に報いる』という事が解ってもらえると思います。

江口　学

聖人（ひじり びと）

住職　江口　貫照

『聖』の字は、「セイ」とも「ショウ」とも読む。又、訓読では、「キヨシ」とも「マサ」と読むが、今一つ、「ヒジリ」とも読みます。

本来、『聖』は天子の尊称であり、智徳圓満の人という意味である。しかし、仏教用語の中では、高僧に対する尊称であると共に、「仏様」に対しての「聖…ヒジリ」なのである。「仏様」に対しての「聖」とは「非知り」の自覚の意である。

近頃、世間で一番問題になっている言葉に「差別」がある。『人種差別』『男女差別』『職業差別』『身体的差別』等々。根底に有るのは、自己の物差しで事の優劣を計り、他を批評する所から生じている。そして、少しでも自分を『良き人』と見てもらいたいという、自己中心的根性の成せる業である。

私共の宗祖『親鸞』に、いつの頃からか、『聖人』の尊称をつけ、『親鸞聖人』とお呼びする様に成ったが、勿論、その一生、その御教えをたずぬれば、正しく『聖人』と崇め讃えられても異論はない。

が、しかし、今一つ親鸞の信仰に深く接すると、その中心となる、『凡夫の自覚』・佛に対して、徹底した『救われていく自分』の『自覚』が「非知り」として見えてくる。

『いずれの行も及びがたき身』なれば、『絶対他力』が有って下さった有り難さ、己が救われなければならない対象であり、それ以外に成佛は有り得ないという確信、その事が同時に縁ある人々、「父母兄弟、有縁無縁全ての人」の救済につながるとの確信が親鸞の信仰であり、人生であった。

今、現在、この私「貫照」はその聖人の呼び声に導かれ、父母先達の歩み行かれし『念佛の大道』を歩まさせていただいております。

尊き御教え受け継ぎ伝えて、
御心を明かせる幾世の聖よ!!
御名「南無阿弥陀佛」呼び讃えて、
世の人、諸共ひたすら仰ぎて、
いそしみ行かなん。
願わくばこの御法
諸人に伝えつつ
御光につつまれて、
良き国に生れなん。

『報恩講』を迎えるにあたり、日頃、感じさせて頂いている了解、思い浮かぶまま、一筆。

住職　貫照
△口　掌

知らなかった自分を見付けられる、
そんな機会を逸して居ませんか？

江口　知日流

今、現在、私は連日芝居の稽古に精を出している。後一週間で本番である。この寺報が届く頃には終わっている。さて、うまくいくものかどうか、ここまで来ると不安を通り越して楽しみである。

平成六年度東京七組同朋大会が今日（十月十六日）から一週間後の十月二十二日に開催される。そこで、『懐かしい音、懐かしい風景』という題で、始めて台本を自分で書き、公演する。

芝居に魅せられたのが十二年前。その時からずっと台本を自分で書いてみたいと思いつつも、一ページも書かないうちに投げ出してしまう始末。それが、今回、おまえが書けと言われて、嫌がおうにも書かずにいられなくなってしまった。そうなるとおかしな物で、今まで全く書くことのできなかった台本を書いてしまった。できの善し悪しは別として、きっかけを与えられたお陰で、自分の思い描いていることを芝居にすることが始めてできた。充実している。違う自分がいる。

我々の生活の中には、常に何かしらのきっかけがある。それに気付くと嬉しさも増す。　了

平成七年度　年回表

一周忌・・・平成六年
三回忌・・・平成五年
七回忌・・・昭和六十四年
十三回忌・・・昭和五十八年
十七回忌・・・昭和五十四年
二十三回忌・・・昭和四十八年
二十七回忌・・・昭和四十四年
三十三回忌・・・昭和三十八年
三十七回忌・・・昭和三十四年
五十回忌・・・昭和二十一年
百回忌・・・明治二十九年

右に記しました通り、来年、平成七年の年会法要は執り行ないます。法事の申し込み、ご相談のある方は、御遠慮なく、ご連絡ください。

「白色白光の会」御案内

十一月の「白色白光の会」は、左記の通り執り行ないます。

記

◎日時・十一月七日（月）午后一時ヨリ
◎会処・順正寺本堂

新規会員も随時募集しております。
詳しくは当寺までお問い合わせ下さい。

ここにきて、だんだん冷え込んで来た。こうなって寒くなると朝起きるのに時間がかかるようになる。眠いのモノ。蒲団が恋しいのは、寒い日に五分でも蒲団の中でモゾモゾしていると、私は冬場は夏場よりも十分早く鳴るように目覚ましの時計をセットする。そうすれば起きてから十分間、蒲団の中でモゾモゾできるという事だ。しかし、ここで気付けばならないことが一つある。モゾモゾしてを付けねばなる。又、気持ちが良くて眠ってしまうのだ。冬場の蒲団のようにうちに在り方について考えてみる。ちょっと違うかな？頭が回らない。お休みなさい。

今、午前三時。蒲団が呼んでいる。

只今寺造り。

A口 掌

〒177東京都練馬区石神井町三の十七の四
☎03（3996）2064
FAX03（3997）8117
順正寺